

連濁における使用領域差と造語表象因

浅井 淳(大同大学) 大野和敏(広東技術師範学院)

1. はじめに

日本語の連濁現象に関しては、統語論、意味論、音韻論、語彙層などの観点から、普通名詞を中心に多くの調査・分析・論考がなされてきた(まとめとして例えば、奥村, 1980; Vance, 2015). 今回、連濁しやすさに関して、複合語が用いられる領域ごとの様相について調べ、その範囲内における社会言語上の見方を述べる。

2. 合成名詞データの集計

連濁は複合語の後部要素の先頭子音が無声阻害音の場合に有声阻害音に交替する現象とみなす。今回の調査・分析の動機として、日常生活上における連濁の生起傾向の観察があった。例えば、「里(/sato/)」であれば普通名詞では「人里(/hito+zato/)」¹のようにやや連濁しやすいが、歌謡曲や詩では非連濁形「古里(/huru+sato/)」をよく見聞きして記憶に残りやすい。姓では「永里(/naga+sato/)」のようにやや連濁しにくく、名では「美里(/mi+sato/)」のように連濁しにくい。このような、語の性質に関してドメイン間の異同に関する指摘があり(Macnamara, 1982)、現代でも生産的な連濁の振る舞い(Vance, 2015)と原因・理由(中川, 1966)に興味に向く。

そこで、「山里(/yama+zato/)」のような複合語の音形を書籍・雑誌、辞書・事典・目録、郵便番号簿、表示目視などにより収集して²、使用領域(仮称)として普通名詞、季語、色名、地名、姓(苗字)、人名、建造物名、店名、商品名、動植物種名などに分けた。前部要素も後部要素も基本の2モーラ(森岡, 1982)が安定で連濁しにくく³、長くなると連濁しやすく、動詞のときに連濁しにくくなるなどの傾向があるため、今回は後部要素が2モーラで数が多く造語性が高い和語名詞を後部要素とする合成語名詞を対象とした(西尾, 1976)⁴。前部要素は語種と長さを限定しなかった。普通名詞は約10万、地名は約13万、姓は約9万種類といった収集データの中から連濁対象となる語を抽出して、例えば後部要素となる形態素の異なり語数25のうち15が連濁する場合0.60というように、語構成に属格助詞が入る場合を除いて、連濁率を求めた。普通名詞は形式名詞も含め、『広辞苑』、『大辞林』、『明解国語辞典』を基にしたため、古い語が含まれる。ここでは、多義語の場合の意味区分をしない。同一語で連濁・非連濁の両形がある場合の扱いが課題となる。地名で両形がある場合は各0.5語とした。姓では「中島(/naka+sima/, /naka+zima/)」のように両形に近い認知度合いの場合のみ各0.5語と数え、原則として多数派と判断された音形にした。アクセントとは異なり、連濁では方言差が小さいものの、商品名では今回は産地がなるべく限定されず種類数を得られる日本酒(清酒)と穀物(米・麦)とした。穀物では意味象徴性が低いとして前部要素が地名の場合を除いた。動植物種名では動物の場合は亜種までの標準和名と種の俗称を用い、地方独自の呼称は採らなかった。植物もいわゆる別称、異称を除いた。曲名は明治時代から2010年までの歌謡曲名とした。

3. 形態素ごと・使用領域ごとの連濁程度

3.1 形態素による連濁程度

集計の結果、普通名詞では、色名や季語も含めて連濁率は使用領域間で概ね似た傾向であった。固有名詞は普通名詞とやや異なる場合があった。主な使用領域について代表的な形態素の連濁率を表1に示す。「高頻」は普通

¹ 音韻表示は訓令式、形態素境界は+印を用いる。いわゆる異体字や旧字は一つにまとめた。

² 参照資料は予稿要旨では出典記載を省く。音形は共通東京語に基づく。商品などは次々と登場するため、現時点での調査結果である。

³ 「尾頭(/o+gasira/)」、「気心(/ki+gokoro/)」のような連濁形が観察された40種の並立構成普通名詞では前部要素1.9モーラ、後部要素2.3モーラだが、連濁形が観察されなかった109種では前部2.0、後部2.1であり、2モーラの場合に連濁しにくい。これには「貸し借り(/kasi+kari/)」のような動詞転成形成や「あれこれ」のような代名詞を除く。

⁴ 集計分析では2モーラ1字形態素を対象とするが、語例は1または3モーラや2字の場合も用いる。

名詞のうち近年の高頻出語として国立国語研究所(2006)を基準とした。「辞書」は普通名詞で、国語辞典の見出し語に近年のメディアに出現した語を加えた。「地名」は近年の自治体統合による新しい地名を含む。「品酒」は日本酒の銘柄を示す。

表 1. 代表的な形態素の主な使用領域ごとの連濁率⁵

形態素	高頻	辞書	季語	地名	姓	品酒	曲名	種名 ⁶
花 /hana/	1.00	0.92	0.85	0.55	0.20	0.0	1.0	1.00
鳥 /tori/	0.55	0.85	0.94	0.38	0.33	0.5	1.00	1.00
玉 /tama/	0.81	0.76	0.80	0.51	0.35	0.57	1.0	—
竹 /take/	0.7	0.74	0.5	0.25	0.00	0.00	1.00	1.00
草 /kusa/	0.58	0.71	0.88	0.29	0.25	—	0.71	0.65
鹿 /sika/	0.0	0.59	0.57	0.32	0.20	0.00	—	0.67

連濁生起の集計結果から、後部要素となる形態素は連濁しやすいに関して、連濁しやすい「柿(/kaki/)」のような高度(仮称; 以下同様)、中程度の連濁程度に位置する「川(/kawa/)」のような中度、連濁しにくい「春(/haru/)」のような低度という3つに大別されるのは先行研究(Irwin, 2016; Vance, 2015)の通りであった⁷。

連濁程度差の要因を簡潔に振り返る。まず、前部要素と後部要素の統語関係がある。並立構成のときは連濁しにくい⁸。前部要素が数詞や接頭辞のときも連濁しにくい。「片(/kata/)」のような部分指示的構成をもたらす前部要素のときも連濁しにくい。例えば、「平仮名(/hira+gana/)」や「読み仮名(/yomi+gana/)」は連濁するが、「片仮名(/kata+kana/)」は連濁しない。一方で、「隅々(/sumi+zumi/)」のような量語構成のときは連濁しやすい⁹。このように、口語化で促音が形態素境界に挿入されるときに連濁作用の重みが最小というように、語構成、語構造成分、語用の各要素値を設定して音形の収束を遺伝的アルゴリズムにより検討すると¹⁰、代表例参照継承は使用領域数が少なく狭い場合や連濁作用の重みが小さい場合に適用されやすい。例えば、「毛皮(/ke+gawa/)」のような高頻出語が連濁形であっても、「皮(/kawa/)」は造語性が高いため、他の合成語に拡張されにくく、全体としてはやや連濁しにくい。なお、「菫(/sumire/)」などでは総称が基本種名になっており、他の種名は連濁しない。「桜(/sakura/)」、「鶴(/turu/)」などは総称が上位科属名であり、その下位分類の種名は連濁するが、「鹿(/sika/)」など民俗呼称の定着で連濁・非連濁両形が混在する場合もある。上位参照がない「檜(/kasi/)」などは音韻的要因が表れやすい。また、撥音後接有聲化(Post-nasal voicing)は、現代東京語では限られた条件以外では顕現化しないため、ここでは連濁に含まれる現象とみなした。

3.2 使用領域による連濁程度

形態素差の次に使用領域差を見ると、使用領域差があまり無い「霧(/kiri/)」(高度)、「月(/tuki/)」(中度)、「露(/tuyu/)」、「下(/sita/)」(低度)などの定数的形態素群と、使用領域によっては普通名詞の場合よりも連濁率が下がる「棚(/tana/)」、「炭(/sumi/)」(高度)、上下変化が有る「竹(/take/)」、「人(/hito/)」(中度)、連濁率が上がる「先(/saki/)」、「端(/hasi/)」(低度)という変数的形態素群と大まかに2分化された。使用領域ごとの連濁率を図1に示す。連濁率は中心が0、外縁が1である。(a)が今回得られた範囲での定数的形態素群であり、(b)が姓・名で連濁しにくくなる傾向のある形態素群、(c)が使用領域による変化が比較的多く大きい変数的形態素群である。

連濁では、前節で触れたように連濁程度で3分化、使用領域間変動で2分化の計6類型化という見方ができそうである。その中では、普通名詞で連濁しやすい高度・変数的形態素が地名や姓では連濁しやすさが下がり、連濁しにくい低度・変数的形態素は上がるという、一種の均等化のような様子がうかがえる。

⁵ 語数が5未満と少ない場合は小数点以下を1桁で表した。語例が観察されなかった場合は一印を付けた。

⁶ 動植物種名では、左枝構造でも右枝構造でも「○竹□」の最終要素が省略されて「○竹」となるような場合を含まない。

⁷ 三間・浅井(2017)は連濁率0.85以上を高く偏在、同0.15以下を低く偏在としたが、閾値に関しては検討が必要である。

⁸ 並立構成でも「物事(/mono+goto/)」、「筋骨(/suzi+bone/)」のように熟合度が高い、または連濁しやすい後部要素のときは、連濁する。

⁹ 「島々(/sima+zima/)」は集合指示的だが、「縞々(/sima+sima/)」は単一物・概念の反復強調であり、擬態語と同様に連濁しない。

¹⁰ 連濁は同音異語を区別する機能は小さいとして、他の後部要素との作用は組み入れていない。

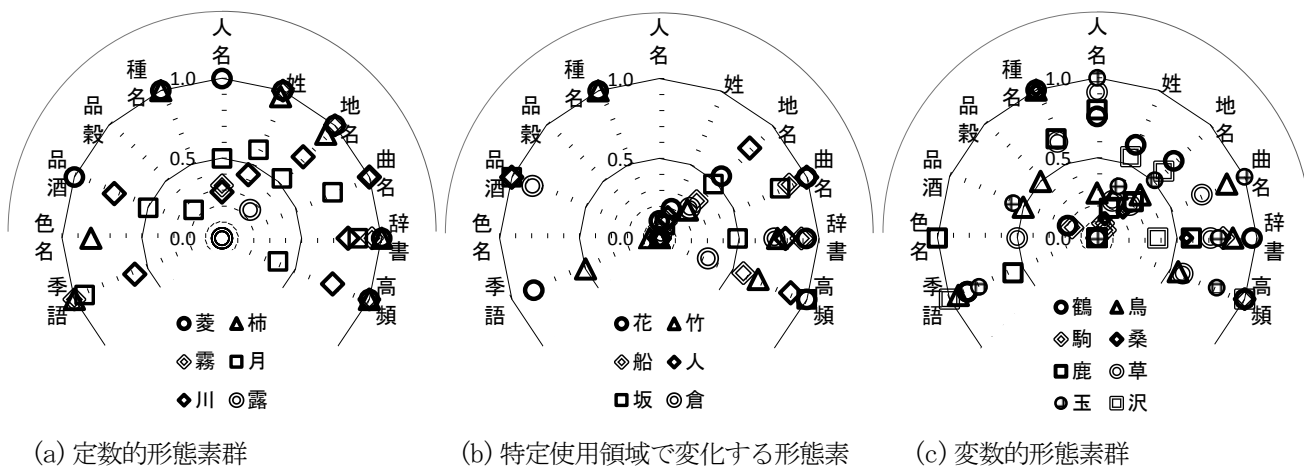


図 1. 使用領域ごとの連濁率¹¹

4. 合成名詞の造語性と連濁傾向

4.1 普通名詞の造語性と連濁傾向

普通名詞でよく用いられる形態素の連濁程度を代表的な意味カテゴリ別にして表 2 に示す。変数的形態素は普通名詞の人工物に多いようである。これは、後部要素の意味範囲を前部要素で限定して対象物を記述するため、連濁率も高めになる。そして、数詞や接頭辞で連濁しないことになる。

表 2. 使用領域間差と意味カテゴリによる形態素の類型化¹²

類型 カテゴリ	低度	連濁程度 中度	高度
空間概念	下/sita/ 端/hasi/ 隅/sumi/		形/kata/ 際/kiwa/
時間概念	代/siro/ 先/saki/	年/tosi/ 時/toki/	
自然形態	春/haru/ 浜/hama/ 露/tuyu/ 川/kawa/	坂/saka/ 空/sora/ 星/hosi/ 霧/kiri/	
動植物		草/kusa/ 鳥/tori/ 花/hana/ 柿/kaki/	
自然利用		畑/hata/ 塩/sio/ 玉/tama/ 塚/tuka/	
人工物		鎌/kama/ 倉/kura/ 炭/sumi/ 橋/hasi/ 笠/kasa/ 棚/tana/	

4.2 固有名詞の造語性と連濁傾向

固有名詞では、肯定的な意味の形態素が選ばれやすい。そして、上位類概念を省くことがあり(森岡, 1982), 特徴や属性を描写して普通名詞と同様の命名がなされたとしても、継承のうちに造語意図が薄れ、姓や地名では対象と語意の結合性が低く、連濁現象知識の平均スキーマが適用されるため、形態素間で連濁程度の平準化作用が見られると考えられる。

また、商品名では、対象が直接指示されず、名称が借用されるか、造語時の連濁傾向が受け継がれることが多い。例えば食用米の種名では、「初霜(/hatu+simo/)」のように普通名詞の語意を借用して特質を表象する場合がある。従って、連濁の様相から見ると、固有名詞には記述と指示の両面を考えることができそうである(まとめとして, Braun, 2006; Soames, 2010)。

¹¹ 該当例が見つからなかった使用領域は空けてあるが、5 語未満の少数例はプロットしてある。後部要素先頭モーラのハ行転呼や母音変化、ならびに後続モーラに削除を含む音変化がある場合は母数から引き、連濁率算出に含めていない。ここでは、「倉」に「蔵」、「船」に「舟」を含めてあるが、「鳥」には「鶏」を含めていない。

¹² 定数的形態素をゴシック体、変数的形態素を斜字体で示す。

4.3 心理的な表象意図

食材・食品によっては、「真蛸(/ma+dako/)」、「真鯛(/ma+dai/)」が広告では「真タコ」、「真タイ」のように非連濁形で表記されることがある。河川名や橋名では、住民による呼称とは異なり、銘板表記が非連濁形になっていることがある。これは複合程度を低くすることで(石井, 2007; 湯本, 1977), 原音保持による意味の明確化, すなわち各形態素の原意を明示する意図があるものと推測される。これには複合語の普及度への対応という社会的な役割もあると推測される。

また, 命名の際に, 形態素の語義からの連想による意味表象という造語意図が含まれると推測される。例えば, 「鶴(/turu/)」の持つ優美さを直接的に表出させたいために非連濁形を取ると推察される。3 モーラ形態素の例に目を向けると, いくつかの使用領域では「光(/hikari/)」のような清明感, あるいは「力(/tikara/)」のような屈強感・剛健感が連想される形態素が多用されることで推測される。一方で, 適用の多様性を利用して, 美しさの中でも特有の可憐さ, あるいは特有の強さを連想させたい意図で「〇桜(/〇+zakura/)」あるいは「〇力(/〇+zikara/)」のように, 普通名詞としての形態素の連濁しやすい傾向が受け継がれることがあると推測される。

4.4 文化的な継承要因

特定の使用領域内で一定の音形が継承されるには, 相撲の四股名のように文化的な要因もある。その場合, 形態素ごとの連濁傾向が反映されやすいようである。シリーズ化された商品名でも, 音形が継承されることがある。

5. まとめ

連濁現象には, 社会における実使用領域上の差異を分析すると, これまで考えられてきた語構成, 語構成成分, 語用論の面のみならず, 語意の表象性という心理的な造語意図など多くの要因が体系的に関わっていると考えられる。今回の調査範囲内では, 「鶴(/turu/)」や「花(/hana/)」が固有名詞, とりわけ商品名で連濁率が下がるといように原意保持や連想表象などの造語意図が含まれ, 心理面の寄与や文化的, 社会的役割の機能が推測された。これら姓や商品などの名称は接触機会が比較的多く, 話者の連濁に関する知識体系化につながり, 造語時に関与すると考えられる。連濁に関しては, 社会言語面などまだ多方面から検討する意義があると考えられる。

謝辞 本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト(日本語レキシコン—連濁事典の編纂)の発展の一部である。ティモシー・J・バンス氏ならびに関係諸氏に感謝する。連濁現象に関してご助言をいただいた上野善道氏, 共に姓の調査に取り組んでいただいた故三間英樹氏, 土木関係名称で協力いただいた樋口恵一氏に感謝する。本要旨の文責は第一著者が負う。

参考文献

- Braun, D. (2006). Names and natural kind terms. Lepore, E. & Smith, B. C. (eds.) *The Oxford handbook of philosophy of language*, pp. 490–515. Oxford, UK: Clarendon Press.
- Irwin, M. (2016). The rendaku database. Vance, T. J. & Irwin, M. (Eds.) *Sequential voicing in Japanese compounds: Papers from the NINJAL rendaku project*, pp. 79–106, Amsterdam: John Benjamins.
- 石井正彦 (2007). 複合語形成と「意味表示の二重性」—複合語形成論における「くみあわせ性」と「ひとまとまり性」— 言語, 36(8), 50–58.
- 国立国語研究所 (2006). 研究開発部門第一領域研究課題『現代日本語における書き言葉の実態解明と雑誌コーパスの構築』における『現代雑誌 200 万字言語調査』による現代雑誌 200 万字言語調査語彙表.
- Macnamara, J. (1982). *Names for things*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 森岡健二 (1982). 語彙の歴史の中の現代語彙. 森岡健二他(編) 講座日本語 4 語彙史 明治書院 pp. 1–27.
- 中川芳雄 (1966). 連濁・連清(仮称)の系譜 国語国文, 35(6), 302–314.
- 西尾寅弥 (1976). 造語法と略語法. 鈴木孝夫(編) 日本語の語彙と表現 大修館 pp. 27–62.
- 奥村三雄 (1980). 連濁. 国語学会(編) 国語学大辞典 東京堂出版 pp. 925–926.
- Soames, S. (2010). *Philosophy of language*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Vance, T. J. (2015). Rendaku. Kubozono, H. (ed.) *The handbook of Japanese phonetics and phonology*, pp. 397–441. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 湯本昭南 (1977). あわせ名詞の意味的記述をめぐって 東京外国語大論集, 27 (再録: 松本泰丈(編) (1978) 日本語研究の方法 むぎ書房).
- 三間英樹・浅井 淳 (2017). 姓に見られる杉藤の法則と拡張版ライマンの法則に関する形態的・音韻的考察. バンス他(編) 連濁の研究—国立国語研究所プロジェクト論文選集— 開拓社 pp. 145–178.